

正会員
 京都大学大学院工学研究科
 都市社会学専攻 助教授
木村 亮
 KIMURA Makoto



トラックの荷台の上で2泊3日

ドラム缶に命を託す

サハラ砂漠自転車旅行の続編である。私の走った縦断ルートは、国境部 600km が軍事上の理由で未舗装であった。ただし、車の轍跡を通れば砂は硬く、自転車でも十分走れるとの情報を得ていた。サハラの砂は年によって状態が大きく変わる。その年は 50cm の新しい砂が積もり、走れる状態でないことが行ってみてわかった。この未舗装区間、自転車を押すと 40 日かかる。干物になるのはごめんで、協議の結果、国境を越えるトラックに乗ることとした。さえぎるものがない炎天下の荷台で 2 泊 3 日の旅。ときにはトラックが砂にハマり立ち往生し、とことん砂にまみれた。

ドラム缶に突き刺した鉄のポールが、未舗装区間の道しるべである。ルート上に 1km ごとに立っているが、砂丘に呑み込まれたり、強風で倒れていることも多い。この未舗装区間を走る場合、必ず数台の車で行くようにと、注意書きが警察署に張り出されていた。その横に、数十

人の行方不明者の捜索願の張り紙。遭難は砂嵐などで道路上の轍跡が消え目標を見失うことによる。地図とコンパスで方向を定めるも、正規ルートから少しずつずれて大きな円を描くように走行する。直径 50km ほどの円である。自分の轍を正しい轍跡と思い込み走り続け、燃料と水と食料がなくなり万事休す。現在なら GPS に誘導されながら走れるが、20 年前はそのようなものはなかった。

ヨーロッパ人の裏庭

オランダから来た大工一家にこの魔の区間で出会った。親戚も含め、5 台の車を連ねてニジェールの田舎まで車を売りに行く途中であった。サハラ砂漠のバカンス旅行を楽しんで、帰りは飛行機で帰っても、冬季に働いた賃金の倍のお金が残る。ヨーロッパ人にとってアフリカは、勝手知った自分たちの裏庭だ。フランス人は西アフリカでは言葉がそのまま通じるので、好き放題やっていた。大型トレーラーにトラック 2 台と乗用車 1 台積んで、トラックの荷台に亀の子のように小さい乗用車 2 台をさらに積んで、すべてをカメルーンまで売りに行くと言ってい



命の綱のドラム缶とポール



ほらほらみんな整列して！

たワイン好きのフランス人。当時、ニジュールには車の正規ディーラーがまったくなかった。多くの車は砂漠を越えて旅行者が運んだ。

夢はいつも喫茶店で

日本での準備期間から、なるべく水を飲まない練習をしていた。1日の水は2ℓと書いたが、これには相当の忍耐力がある。夏の暑い日、0.5ℓのペットボトルなどすぐに飲み干せる。サハラでは、水を口に少し含んで少し飲む。楽しみは満天の星の下での、食後の一杯の甘い飲み物。緑茶も飲んだが砂糖を入れて飲むと、何ともいえずおいしかった。夢のパターンはほとんど同じ。喫茶店でウエイトレスが、テーブルの上に水の入ったグラス置く。側面に水滴が付いている。ただ眺めるだけでいつも終わった。「夢の中だけでも飲んどけばよかった。残念！」。

団車で走ると逆に水を要求されるので、途中から単独で走っていた。一度ベンツのジープが止まってくれた。30代のカップルだったが、「水が欲しい」と言うと、紙コップに水を入れてくれた。運転席と助手席の間に、ボタンを押すと水が出るポットが置いてあった。なんと夢にまで見た『冷水』であった。しばらくコップを握り締め、その冷たさを楽しんで、ゆっくり喉に流し込んだ。今まで飲んだなかで一番おいしかった水。小さな村のコーヒー色した井戸水も、トラックの運転手が差し出した緑の植物性プランクトン入りの水も、捨てがたいが、あの一杯の『冷水』は格別で、50kmは走れた。今も喉に詰まることなく水なしで、サンドイッチもお弁当も自由自在に食べられ



る。自慢にならないか。

ヨットとは違うでしょ

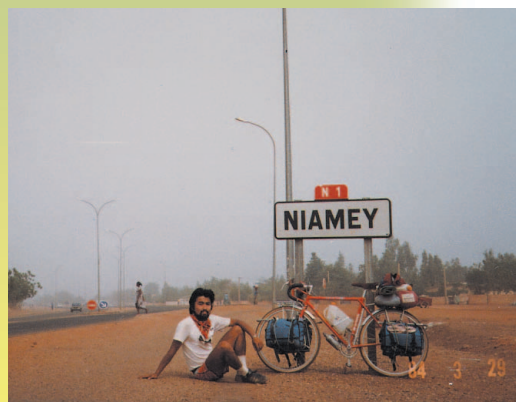
地中海から吹く追い風を味方にして走る。遠征隊を出したクラブのリーダーの発案で、実は帆掛け自転車になっていた。「俺は少なくとも理系ですよ。ヨットは傾いても風を受けられるけど、自転車は傾いたらすぐこけるよ。ハンドル握りながら、帆の操作はできないよ。よっぽど風が吹かない限り、自分でこいだほうが楽で速いよ。横を走るトラックの風圧で、巻き込まれるのは御免だよ」と思っていた。三輪車なら可能だが、理系の面目は保て、まったく役立たず。最近、技術開発には『発想の転換』が大切だと、能書きを垂れているが、『無茶な発想』では『転換』は無理である。



世界初の帆掛け自転車？！

自転車の楽しさは、風を切り、空気を肌で感じることである。サハラ砂漠の空気は熱く、爽やかな旅ではなかった。現在、大学という特殊な場で仕事をしているが、徹夜で何かをやることなど、あの苦しさに比べればまったく比較にならない。何事に対しても、持続的に耐え忍びながら努力すれば物事は実現することを、暑い大地が教えてくれた。アフリカ奥深し。

自転車の楽しさは、風を切り、空気を肌で感じることである。サハラ砂漠の空気は熱く、爽やかな旅ではなかった。現在、大学という特殊な場で仕事をしているが、徹夜で何かをやることなど、あの苦しさに比べればまったく比較にならない。何事に対しても、持続的に耐え忍びながら努力すれば物事は実現することを、暑い大地が教えてくれた。アフリカ奥深し。



2ヶ月の熱風と砂との戦いの果てに